

釣りに釣られて

高原英夫

第十四回 「釣れる竿の話」

「弘法筆を選ばず」とか、はたまた「玩物喪志」とか、何かをするとなれば、当然その道具の話となる。最初から形にこだわり、高価な竿がそのまま釣果につながるのなら訳はない。

私は溪流釣りを始めたころ、グラスロッドを使っていたが、いったんカーボンにしたら、もうグラスのものは使えなくなつた。ほんの三、四メートルの幅の流れの中にイワナの居所を見極め、その数メートル先にタマクラミミズを刺した針を流していく。目印がピタツと止まる。ほんのわずかな瞬間だ。もつとも、だからといってすぐ合わせても必ずしもイワナはかかるといふものではない。また、川底にひっかかっていることだつてある。あたりを確認しつつも、完全な食いを求めて、何度か小さく手首できく。その時にカーボンと、グラスの違いがよくわかる。手首のほんの小さな動きが針先まで伝わる鋭さ、これがカーボンにはある。グラスだと一度竿の胴に力が行き、それから竿先へ、そして針へと合わせの伝わり方がやたらと遅

く感じてしまう。ゼロコンマ何秒の差があるのだ。ましてや山奥の広い溜りに使おうと六メートルくらいの竿を持った日には、重いやら、竿がいつまでも波打っているやらで、釣れる気さえしなくなる。四く五メートルの竿なら、手元の振動も一瞬に消して竿先がピタツと前方を差しているようであればいけない。

今から二十三年前、私は東京に転勤となった。釣り、それも溪流釣りとなればもうほとんどやれる見込みはなかった。それでも送別会の日、みなさんから饞別にとアモルフアス製の溪流竿をいただいた。よく一緒に釣りに行ったSさんの見立てだとすぐわかった。四・二メートルの長さといい、振動の吸収の速さといい、明らかに高価なものだとわかった。

東京ではゴルフの話は出ても、釣りの話はまったくといっていいほど出てこなかった。釣りはマイナーだった。ましてや溪流釣りなど、釣りの専門雑誌でながめているだけだった。もちろん、青森へ、帰省なり出張なりで帰る度には、Sさんと津軽半島の川をあちこちと釣り歩いた。しかし、五年東京にいて、数えてみても年に二く三回で、そんなに釣りに行けたというものではなかった。

転勤で青森に戻り、さつそく二人で秋田県境に近い川に出かけた。川に入るには、溪谷が深く、降り口にワイヤロープが取りつけられていてそれを三、四十メートルは伝い降りたと思う。溪相はすばらしく、ところどころに大きなプールほどの水溜りがあり、互いに釣つては「デカイ、デカイ」と見せ合いながら釣りを終えた。ところが、車まで戻るにはもう一度、降りた所まで川の中を下り、そしてまたワイヤを伝いよじ登らなければならない。その時に限つてアモルファスの竿が先端から二本固着してしまつていた。いつもなら竿尻のキャップをはずし、固着した部分を取り出し、平らな岩に、何度か真上から落としてやると、気を失つた人間が急に膝の力が抜けて体が崩れ落ちる様に、すつと固着が解ける。その日はどうしてもだめだった。仕方なくリュックにアンテナを出したようにして急な斜面というよりは崖を登つた。Sさんが先に登り私を待っていたが、登り終わるなり、

「竿先が折れている」

私はリュックを降ろし、見た。テグスはつけたままだったので穂先はぶらんと下がっていた。無理したとは思つたが、どうしようもなかった。買った釣具店はわかっ

ている。見立てたSさんは自分のことのように残念がり、すぐ釣具店で竿先を取り替えられると言ってくれた。

数日して釣具店へ竿を持参した。ところがである、なんと製造して五年以上経ち、すでに替えの竿先はないというのだ。何度かは使ったとはいうものの新品に近く、転勤中の五年はやはりそれだけ長い時の流れだったのだ。あのピタッと一直線に川面にのびる竿の感触が忘れられず、使えもしないのにいまだに持っている。それはSさんへの申し訳ないという気持ちも含めた竿への敬意でもある。

さて、今度は海の竿の話である。海での投げ釣りを始めたのは三十数年前で、何本も折りはしたが、船釣り竿二本、投げ竿二本はその当時のまま、まだ持っている。いずれもグラスロッドでそれだけ頑丈だということだろう。先ほどの溪流での竿の話ではすこしグラスロッドを貶めた感があったが、実は船釣りでは少し違う。

たびたび登場する船頭Iさんの竿のことである。Iさんの船で釣りをするようになって十数年になる。そのころ時々、これも以前書いたNさんと二人だけで船に乗

り釣りをした。主にはテンカラ狙い。そして秋にはタイだ。Iさんも竿を出すのだが、当然船の操舵のこともあり、右艦に電動リールを備えつける。しかし、どの釣りの時もおんなじ竿なのである。我々であれば、タイはタイ用、ヒラメはヒラメ、ソイ、テンカラはまた別と、数本魚種別というよりも、釣る深さによつて変わるオモリ別に竿を使い分けていて、それはあまりに当然のことだと考えている。ということは、プロの漁師であるIさんが、八十号くらいのオモリから三百号までのオモリが使える竿を一本、何でもかんでも用に使つていふことである。

私は、社のある先輩が定年で退職する時、自分はもうこれから船での大がかりな釣りをすることもないだろうからと言つて、オモリが二百号と百二十号に対応する竿を二本いただいた。有名なメーカー製の立派なものだ。いつも二本持つていき、今日はオモリ三百号でやるとなると当然二百号用で仕掛、リールを取り付けて釣り始めることになる。ところがIさんはいつもいふのである。

「高原さんのは硬すぎる」

しからばと、やつているうちに百二十号の竿に二百五十とか三百号のオモリを下

げるようになっていた。竿先が海面へしなり、いかにも柔らかくなったようにはみえるのだが、Iさんのいつている意味はまだ違っていた。

私は二度目の東京転勤で四年近く釣りから離れた。そして帰ってきて、またNさんと一緒にIさんの船に乗った。なんとNさんの竿はすっかりIさんと同じものになっていった。化粧の塗りは一切していない。薄緑に透明感のある、中が空洞となっていない、いわゆるソリッドのガラスの手作りの特注ものだった。たしかに以前から、その竿でなかった時でも、特にテンカラ釣りとなるといつも私の数倍も釣っていた。そしてその日からまたまたその差は大きくなった。中通しの竿にしてみたりした上でたどりついた結果だという。ソリッドにもカーボンもあり、またその上の質のものもあるというのだが、ガラスで十分なのだという。

何が一体違うというのだろう。普通私は、いわゆる中が空洞になっているチューブラーと呼ばれる竿を使っている。投げ竿もそうだったし、継ぎ足し竿にしろ、延べ竿にしろほとんどがそうだ。ただ相当以前に投竿の先を折り、修理したことがある。すると釣具店ではガラスのソリッドの中からちょうどいい太さと長さのものを

選び出し、ちょうどいいガイドをつけて替えてくれた。だから、その竿先がそのまま握りまで伸び、一本でできていると思えばいい。Iさんが、そしてNさんが三百号のオモリをぶらさげると、もうそれだけで相当しなっている。海中へナマリを落としてもそう変わらない。この竿の威力はここからだ。そのしなり方が完全な胴調子なのだ。テンカラ釣りに最も適しているその胴の粘りがはつきりと見える。まず底をとる。その難しさは一旦置いておいて、テンカラが食いつき、あたりが竿の胴に確実に伝っている。そして次々とテンカラが十数本の針に何匹も食いついてくるのがこれがまたよくわかる。そしてここが肝心なところなのだ。尻の日はまだそう差はでないにしても、少し波があつたりすると、竿先は二〜三メートルくらいは上下を繰り返す。チューブラーの竿はその上下がそつくりそのまま海底のオモリを上下させていると思えばいい。竿の反発が鋭く、溪流とかカレイを釣っている分にはすばらしいことなのだ。百五十メートルとか二百メートルを超える深さになるとこれが逆になってしまう。つまりロッドキーパーにつけたままなのだから、きたからといって合わせるわけではないのだ。竿先のあたり具合で魚種を推定し、向こ

う合わせにし頃合いを見て電動リールのスイッチを押す、それだけなのだ。だからテンカラであれば、いきなり波のままに上へ引き上げられ、長い時間そのままにしておく時に口が切れたりする。実際、エサにサバの切り身を使うのだが、あたりがあり巻き上げてみるとわずか一匹だけで、何本かの針からサバがなくなっている。サバの切り身はそう簡単に針からはずれるものではない。いつも釣りから帰って用具を洗うのだがサバの皮が釣り先からとれず苦勞しているくらいなのだ。強い波の上げ下げに魚がバレてしまっているのだとわかる。ソリッドの竿は胴で波の上下を吸収してしまっている。だから海底では思った程の仕掛けの上下はないのだ。であれば海底からの位置は一定に保ちながら、尚かつあたりを竿に、その胴に伝えてくるのである。釣れるわけである。

かつ、根がかりの時のことだ。ヤバイと思つたら「瞬動」のスイッチをすぐさま押す。対応が早いと折れんばかりに竿は曲がるがうまく外れることが多い。またしっかり根がかりしたとする。「瞬動」を押し続ける。竿が折れてしまうかのそれ以上に曲がる。それでも押していると仕掛けの道糸の十二号の方が切れて空回りした様に

残りが上がってくる。何という竿だろう。

Iさんは私の竿が何でできていいのかわかるものだから、根がかりだと飛んできて手でテグスを持ち、根がかりを外そうとする。多分そのままでは竿が折れてしまわずだ。

長い経験から生まれたひとつの竿選びの結論なのだと思う。

ところで私の竿は実はソリッドではない。欲しくて仕方がないのだが、これはこれでやたらとソイがかかる。七月の中旬には四十七センチ、末には六十センチ、八月の末には五十一センチと結構な大物ばかり仕留めている。実績がある以上、他の竿というわけにもいかない。また年金生活ともなれば、そうそう新しいものを買いたい求めるわけにもいくまい。

でも、もしテンカラとなつたら是非すすめたい。魚は最適な竿からエサを垂らしてくれるのを待っているのだと勝手に思うとしよう。

平成23年6月